

# Interview

ペット業界のはたらき方  
～私の場合～

Vol.6

## 獣医療におけるクラフトマンシップ

京都市獣医会 副会長  
京都中央動物病院 院長

村田 裕史先生



### Profile

1997年  
1997年～  
2001年～

2004年5月  
2009年5月～2017年4月  
2015年4月～  
2015年5月～  
2015年5月～2017年4月  
2016年4月  
2017年5月  
2017年11月～

2018年1月

麻布大学 獣医学部獣医学科卒業  
大阪市内そして吹田市で動物病院に4年間勤務  
大阪の箕面市にある北摂夜間救急動物病院にて院長職（主任獣医師）として3年間勤務  
京都中央動物病院を開業  
京都市獣医師会 公益事業推進委員会に所属  
京都夜間動物救急センター運営委員会に所属  
京都市獣医師会理事  
京都市獣医師会 公益事業推進委員会 委員長  
京都夜間動物救急センター運営委員会 委員長  
京都市獣医師会 副会長  
関西盲導犬協会における診療担当医（京都市獣医師会と関西盲導犬協会の診療委託事業の提携による事業）  
RECOVER BLS&ALS インストラクター

### Q.クラフトマンシップ (Craftsmanship) とは？

このクラフトマンシップとは英語の Craftsmanship のことであり、意味としては職人技とか職人の技術のことになります。今の時代こんな言葉は古臭いし、ややこしいと敬遠する人もいるかもしれませんが、獣医療の診察において一番大事なことは動物のからだをよく見てよく触ることです。そして、何よりも治療は動物の体を触り、薬を投与したり、手術したり、処置を行うことで達成されます。このように獣医療の診断と治療には手先を使った地道な作業の繰り返しが大切であり、このような地道な作業が今の時代であってもより良い獣医療の根本になっていると思います。

こんなことを言っておりますが、実は僕自身も、大学を出て新卒として務めた病院の院長先生がよく職人さんの話や例え話を多く話していて、なんだか古くさいこと言っているなと思ったことをよく覚えております。大学を出たばかりだったので、経験とか勘に頼ったような職人技と獣医療は違おうと思っていたのですが、やっぱり基本的な動物の保定、採血、静脈カテーテル挿入、そして雌犬の尿道カテーテル挿入 etc, 手先を使ったこのような処置などは本当にびっくりするぐらいうまくできなくて、所詮、頭ではわかっているけど体がうまく動かなかつたら理想の診察や医療を追求することはできない現実を目の当たりにしました。もちろん、外科手術なんてそれこそ執刀させてもれえるところか、助手をしても怒られたりしておりました。

このような日々を過ごしているうちにだんだんとできることが増えていき、そして、その手技が洗練されてくることが実感することができました。このような経験を通して小動物臨床医＝職人さんの図式が刷り込まれていったのではないかなと思っています。

繰り返しになりますが、職人技＝クラフトマンシップ (Craftsmanship) の響きが古くさいとか思ったことがないわけではないのです。しかし、臨床での経験年数がたってくると、これは大切なことだなと実感してきております。

### Q.Craftsmanship (職人技) vs AI

Craftsmanship(職人技) vs AI って聞いたときには、誰しもこれは無謀な勝負だと思ってしまうと思います。今後、様々な場面でAIが発達してくることが予想されることに異論を唱える人はだれもいません。AIが人間と勝負する将棋や囲碁で勝利するニュースは本当にびっくりしますが、そのうち、当たり前になり、ニュースにすらなくなる日もくるでしょう。

医療の分野においてもIBMのワトソンが話題になったりしておりました。また、別のニュースでもAI診断は現在でも人の目の診療の70%程度は診断が当たっているなどの記事を見たことがあります。このようなニュースだけでなく、2045年と今からそう遠くない未来にシンギュラリティ (Singularity 技術的特異点) が来ると予想されております。



そのころには多くの職業のあり方が根本的に変わっているでしょう。シンギュラリティを超えると人工知能の方が人間より賢い世の中になっている？かなり衝撃的な未来だと思います。シンギュラリティを迎える前ですらプロの棋士が負けるレベルの AI に対して Craftsmanship(職人技)かと、思いますよね。でも実はここに勝機があるんですよ。AI 囲碁 (AlphaGo) のシーンを覚えている方もいるかと思いますが、碁盤に碁石を並べるのは人間が行っております。あんなに大きな碁石ですよ。そんなものもつかめないのか？って思いますよね。もしかしたら、次の ver. ではつかめるかもしれないですけどね。



しかし、問題は碁石ではありません。獣医療です。今後さらに AI が発達すると残念なことです。獣医療においても診断の一部は AI に置き換わる可能性はあると思います。ただし、獣医療の場合は犬だけを見ても犬種が多く、個体サイズの差も大きいですし、猫もそうですが、鳥類やエキゾチックアニマルもいれると動物種もさまざまですから、獣医師の触診などでわかるような診断部分、そして、何よりも動物の体に触る手術や処置の治療の部分では AI が行うことは難しいと思います。ここがポイントです。AI に対して Craftsmanship が大きなアドバンテージを持つ部分です。シンギュラリティを超えて極端に AI が発達して、すべて診断を AI が行うような時代がやってきても、動物の体を直接触って手術や処置を行うことは獣医師が行うことになると考えております。薬や処方食も獣医療に欠くことができない大切なものです。しかし、使用期限があります。いつも使っているスマートフォンやタブレットもバッテリーがなくなるとただの鉄の塊で文鎮ぐらいにしかありません。しかし、この Craftsmanship(職人技)は一度身につくと簡単にはなくなるものではありません。使用期限がないとはいませんが、かなり長い時間使用することができますし、バッテリー切れの心配もないのです。

このような Craftsmanship(職人技)は素晴らしいですが、泥臭く継続して身につける部分が多くあります。これが最大のネックであることは間違いありません。今では獣医療を勉強するにあたっては、オンラインでセミナーもみられますし、様々な情報をネットで調べることもできます。ただ、手術や技術などをセミナーで見てもそれは身に付きません。やはりコツコツと続けることが必要となります。知識の部分は、依然と比べると書籍での情報も増え、そして、セミナーや勉強会の機会も増え、さらにはインターネットの情報を、パソコンやスマートフォンやタブレットで簡単に調べることができるようになりました。このような時代だからこそアナログで手先を動かすような技術や手術、すなわち Craftsmanship(職人技)の価値が、今後も高まっていくことになるのではないのでしょうか。

## Q. 外科手術とか処置は手先が器用な方がいいの？

手先が器用かどうか？僕自身は少なくとも器用ではありません。器用な人であれば、ある外科手術をすぐにマスターできるかもしれません。しかし、僕自身はそのような手術を何度も繰り返す必要があると感じております。手先が器用な獣医師をうらやましく思うこともないわけではありませんが、逆に、器用でないのと同じことを飽きないですと繰り返すこともできます。そして器用でないのでもうまくいかなかったときに反省することができます。他の分野は分かりませんが、小動物臨床の外科手術において、器用さは必須ではないと考えられます。手先が器用な獣医師は、仮にある外科手術を実施して、どうやって成功してるのか？どのようなところが危険なピットフォールになるのか？これを他人に説明することができません。なぜなら、無意識に成功しているため、この感覚を詳細に説明することができないのです。

外科手術とは再現性のある手技が求められます。再現性が高いものとは、極端な話では確実なステップを踏み原則を守ることにより、だれにでもできるものが理想です。この再現性と普遍的な手技が重要なものであると考えております。確立して広く普及していることによりそれだけ多くの動物たちの命を救っている手技なわけですから。もちろん専門性の高い、唯一無二の技術とか神がかり的な技術というものは尊いですし、それで助かる動物もいますが、多くの獣医師が同じような技術を身につけられなければ多くの動物は救えないのは明らかです。唯一無二の技術を持つ人がいなくなってしまうとそこでその技術も途絶えてしまいます。このような理由から、手先がすごく器用な人が行う神がかり的な手技は、スタンダードな外科手技とは少し異なるものであると言えます。そのような特殊な技術ではない、スタンダードな外科手技は器用でなくても身につけていくと自分は信じております。

コツコツと技術を積み重ねることが大切なことであると同時に、同じことだけを繰り返していてもいけないこともあります。新しい外科手技が出てくることもあります。また、技術革新により新しいデバイスが出てくることもあります。縫合糸などもかなり変化します。このような情報についてはアンテナを張り巡らしている必要があります。この情報入手そして検討することは外科手技だけでなく、内科なども含め小動物臨床には必ず必要なことです。問題は情報量が飛躍的に増えていくこと、そして、必ずしも新しいものが best な選択ではないことがある点です。これも外科手技



に限ったことではなくすべて分野に当てはまります。

## Q. 今後チャレンジしたいことは？

新しい技術や知識を学んだらやはりチャレンジしていきたいと思います。もちろん動物の命がかかっているので、無謀なチャレンジはしませんが、いい医療を提供するためにチャレンジは少しずつでもしていきたいと常に考えております。

特に外科分野は、ある程度のリスクはつきものです。このリスクをとってチャレンジをする精神力と体力は本当に重要だと思っております。今の世の中、以前と比べると訴訟の問題やインターネットでの誹謗中傷などのリスクが本当に増えております。このような風潮が広がるのが、実は外科手術の発展や獣医療の発展にブレーキをかけている側面があることはもっと様々な場面で多く語られてもよいと考えております。

年齢がいつているからと手術を諦めている、年齢がいつているからと悩んでいるうちに腫瘍が進行している症例が転院してくることは日常の診療ではよくあります。これが本当に正しいことなのでしょうか。外科手術や全身麻酔はリスクがあります。しかし、このような症例に対して、完治させる可能性がある外科手術を実施すること、手術と麻酔のリスクをとることの大切さだと思います。

## Q. 若い獣医師さんへのメッセージを！



臨床を行うと決めたならば、泥臭くてもこつこつと繰り返し行う事で技術を身につけていってほしいと思います。今の世の中はデジタル化が進んでいますが、デジタルではわからないような感覚的なものは獣医療には重要だからです。カテーテル一つにしたって、経験がないとスムーズに入れることは大変なことですね。そのような技術を身につける努力を地味でかっこ悪いなんて思わず、積極的に行い経験してほしいと思います。

そして、先ほど述べたようにリスクをとる勇気を持ってください。チャレンジをしないと次のステージには進めません。リスクを冒さないように、減点されないような姿勢で成功した臨床医に今まであったことはありません。臨床医といったのは、外科だけでなくこれは内科などすべての分野の臨床の技術、治療などにあてはまると考えているからです。

この外科手術は当然ですが、日本、アメリカやその他の国でも同じ手技が普及していることも多いものです。言葉や文化を超えてこのようなことがあるのは本当に素晴らしいことです。ですので、これから若い獣医さんがどんどんとチャレンジをして、新しい外科手技や技術を確立し、それを世界に向けて発信して、更に世界で普及し、世界で多くの動物の命が救われるようになる。そんなことがどんどん現実になっていくと本当に素晴らしいことですね。

外科手術だけでなく、小動物臨床にはリスクがあるため精神的に、そして、体力としても大変な場面も多くあります。ですので、最近ではそのような面を敬遠し、内科だけするか往診に特化した施設もあります。このような流れがあるときなので、なおさら外科手術などの技術を持つ価値が高まっていきます。先ほど述べたように、AIが発達しても、最終的に動物に直接さわる触診や外科手術は重要です。ぜひ、このような時代だからこそ、獣医療における Craftsmanship (職人技) の重要性を認識し、チャレンジをしていってください。